

『明日きみは結婚するわけだが』

仲村ゆうな

## あらすじ

結婚式前夜、独身最後の夜、淡路主人は杉田春と過ごしていた。これから先も一緒にいるというのに、と笑う主人。談笑するうちに、春がぽつりと呟く。「奥さん、どんなドレス着るんだろうね」。

同僚である二人は他人には言えない関係になっていった。後悔の中、話し続ける二人。すると突然、春は来月転職すると告げる。自分のせいかと戸惑う主人に、春は順番が違うと言う。転職が決まり、その後主人と関係を持ったのだと。もう奥さんを裏切るようなマネはしないでと言い、主人は強い気持ちで頷いた。何か思いを残しながらも「末永くお幸せに」と、春は主人の家を去るのだった。

一方、新婦の宮本朱莉は女友達と独身最後の夜を楽しみ、友人の田口佳奈と帰宅していた。朱莉の家に泊まることになった佳奈。佳奈は明日、友人代表としてスピーチを頼まれていた。朱莉がシャワーを浴びている間に明

日の原稿をチェックする佳奈。何故か原稿は二通あった。

明日のスピーチを楽しみにしている朱莉。佳奈に一番に祝ってほしいのだと目を輝かせる。朱莉が寝付いたのを見計らって佳奈は、明日は読まない手紙を手にする。それは、朱莉への本当の思いを綴ったものだった。佳奈が読み終わったころ、眠ったふりをしていた朱莉は静かに涙を流す。

所変わってホテルの一室。宮本麻由と淡路拓真がいた。大学時代の同級生だった二人。結婚式前夜に何をやっているんだか、と呆れて笑う。大学時代付き合っていた二人は別れた後も時折会っていたが、明日以降は会う機会も無くなるだろうと話す。はっきりした別れの言葉もなく、拓真は先に眠りにつく。その後、麻由の元に電話がかかってくる。相手は明日結婚式を控える妹だった。幸せになりなよ、と、意地を張った自分の分も麻由は妹、朱莉の幸せを願うのだった。

翌日、新郎の圭人、新婦の朱莉、参列者の春、佳奈、そして親族の麻由と拓真。それぞれ思いを抱えて結婚式を迎えるのだった。

## 登場人物表

淡路圭人（26） 新郎

杉田春（26） 圭人の同僚

宮本朱莉（26） 新婦

田口佳奈（26） 朱莉の友人

宮本麻由（29） 朱莉の姉

淡路拓真（29） 圭人の兄

父親（53） 朱莉の父

母親（52） 朱莉の母

○マンション・部屋（夜）

淡路圭人（26）・杉田春（26）、入って  
くる。

圭人「ただいまーっと」

圭人、部屋の電気をつける。

春「ふうー、飲んだ飲んだー」

圭人、上着を脱ぎソファに倒れこむ。

春「ほらほら、寝ないでよ」

圭人「うーん」

春「弱いくせに飲んじゃってさあ」

圭人「いいじゃん、別に」

春、圭人が脱ぎ捨てた上着を拾いハン  
ガーにかける。

春「最後に飲むのが私とでよかったの？」

圭人「ん？」

春「独身最後の夜なんだから男友達と飲めば  
よかったのに」

圭人「お前でいいんだよ」

春「そこは私『が』よかったんだよって言わ  
なきゃ。だからモテないんだよ」

主人「うっせ」

春、台所に向かう。

主人「またこれからも嫌という程顔合わせるけどな」

春「まあねえ。水飲むでしょー？」

主人「うん」

春「冷蔵庫開けまーす」

春、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出す。

主人「あ、飲み直す？」

春「だーめ」

主人「けーち」

春、主人に水を差し出す。

春「そんな強くないくせに」

主人「これでも強くなっただ方だって」

主人、水を飲む。

春「明日飲まされるんだから、今日はもうや

めときなよ」

主人「あー、そっかー」

主人、ペットボトルを春に渡す。

春、水を飲む。

主人「二次会……三次会まで行くかな？」

春「知らないよ」

主人「行きそうだなー」

春「新郎が潰れないでよ？」

主人「介抱頼むわ」

春「やだよ。私だってドレスアップするのに」

主人「だよな」

主人、春を見てニヤニヤ笑う。

主人「明日のためにダイエットしてたもんな」

春「まあね」

主人「ドレス、似合ってたよ」

春「一人で見に行ったからさー、選ぶのに時

間かかった」

主人「一緒に行けなくてごめんな」

春「別にいいよ」

主人「すごく綺麗だよ」

春「……その台詞は明日言いなよ」

主人「そっか……」

春「うん」

圭人、ソファの上で正座になる。

圭人「いろいろ回り道しましたが」

春「しすぎだよねー」

圭人「はい……」

圭人、頭をボリボリかく。

春「幸せにしてよね」

圭人「はい」

春「幸せになってね」

圭人「……うん」

春、ペットボトルを持って台所に向かう。

春「奥さん、どんなドレス着るんだろうね」

圭人「さあ……」

春、ペットボトルを冷蔵庫にしまう。

春「何、奥さんのドレスも一緒に選んであげ

なかつたの？」

圭人「一人でいいって言うから」

春「だからモテないんだよ」

圭人「ええ？」

春「よく結婚できたよね」

圭人「ほんとなー」

春「二年付き合ってゴールインかー。一番理想だわ」

圭人「……」

春「ちよっと」

圭人「へっ？」

春「気まずくならないでよ、やりにくい」

圭人「あ、悪りい……」

春「てかもう今日は忘れよう。楽しく飲んだ、同僚として。それだけ。てかこれから先も忘れよう。何もなかった、ただの同僚」

圭人「うん……」

春「……って都合良すぎるか」

圭人「あぁー」

圭人、頭を抱える。

圭人「会社の人たちにバレてたりすんのかな」

春「うちの関係？」

圭人「うんー……」

春「それはないっしょ。誰にも言っていないし」

圭人「俺だって言っていないけどー」

圭人、頭をかきむしる。

圭人「課長とか無駄に洞察力高いじゃん」

春「大丈夫っしょ。チャラついてるイメージないし」

圭人「ほんと馬鹿なことしたなー」

春「……バカ」

圭人「なんか明日気が重くなってきた」

春「あたしもだよ」

圭人「もう誰にも会いたくない」

春「それは無理でしょ」

圭人「だって俺だけ抱えてる思い重くね？」

春「あはは」

圭人「笑い事じゃないから」

春「笑うしかできない」

圭人「明日全員欠席とかないかな」

春「ないね」

圭人「今風邪流行ってるから」

春「いや点滴打ってでも来るよ、あの人たち」

圭人「なんか妙に張り切ってたよな」

春「うちの課から新婚出るの久しぶりだから

ね」

圭人「余興もノリノリだったもんな」

春「あたしも練習したし」

圭人「なんか意外だなー」

春「人をノリが悪い人間みたいに言わないでくれる？」

圭人「すいません」

春「何気にちよっと気合い入ってますから」

圭人「：：何すんの？」

春「それは当日のお楽しみだよね」

圭人「あんま変なことすんなよ」

春「何、心配してんの？」

圭人「心配、はしてないけど」

春「結婚式で仕返しでもするんじゃないかって？」

圭人、ぎこちなく頷く。

春「不倫ドラマの見過ぎ」

圭人「だって」

春「心配しなくても、後出しジャンケンしたのは私なんだから、何もしないよ。てかで

きない」

圭人「そっか」

春「安心した？」

圭人「う、うーん」

春、ため息をつく。

圭人「何よ」

春「別に」

圭人「気になるな」

春「あ、そういえば」

圭人「うん？」

春「私、会社辞めるから」

圭人「……は？」

春「来月送別会よろしく」

圭人「え、ちよっと待ってよ」

春「何よ」

圭人「何で急に」

春「別に急でもないんだな、これが」

圭人「え？」

春「大学ん時の友達がさ、会社立ち上げるんだって。アプリの。それに誘われたの」

圭人「そっちに行くってこと？」

春「そ。なんかベンチャー企業みたいな？ 楽しそうじゃん」

圭人「…：俺のせい？」

春「自意識過剰」

圭人「ごめん」

春「てか順番逆だから」

圭人「じゅ、順番？」

春「友達に誘われて、転職しようかなーって思ってた時に結婚するって聞いて」

圭人「随分前から転職決まってたってこと」

春、頷く。

圭人「まじかよ。お前、言えよー…：」

春「気づかなかった？」

圭人「ぜんっぜん」

春「そういうとこだよなあ」

圭人「だって全然そんなそぶり」

春「で。でね、どうせもう会わないだろうし、会社辞めるからね。そーいやちよっと好きだったなーって思って」

圭人「で、俺と、そのー、こういう感じに」

春「なっちゃったねー」

圭人「まじかー」

春「地獄に落ちるね、うちら」

圭人「でもまあ、結婚する前だったからセー

フ：：：」

春「は、死ね」

圭人「当たり前強くない？」

春、頭をかく。

春「あー、改めて考えるとほんと嫌な女だな、

私」

圭人「俺にだって、責任はあるよ」

春「そっちはあれじゃん、ほらマリッジブル

ー的なの？」

圭人「でも」

春「もう奥さん裏切るようなことしちゃダメ

だよ。：：：ってどの口が言うんだって感じ

だけど」

圭人「分かってる」

春「奥さん、幸せにしなきゃ」

圭人「うん」

春「ん」

春、カバンを持ち立ち上がる。

春「じゃ、帰るね」

圭人「え、帰んの」

春「帰るに決まってるでしょ」

圭人「もう遅いし、泊まってけば？」

春、笑って、

春「さすがに無理」

春、玄関に向かう。

圭人、慌てて追いかける。

春「じゃあね」

圭人「送ってくよ」

春「いいよ、酔っ払い」

圭人「もう酔いさめたし」

春「はいはい」

圭人「ほんとに。待って上着取ってくる」

春「いいから」

圭人「送るくらいさせてよ、最後に」

春「じゃあ最後のお願い聞いてくれる？」

春、圭人の目をじっと見つめる。

圭人、ごくりとつばを飲み込んで、

春「明日のために、今日は早く寝て」

圭人「……はい」

春、靴を履きドアノブに手をかける。

春「じゃ、また明日」

圭人「うん。あのさ」

春「ん？」

春、圭人をじっと見つめる。

圭人「……ごめん」

春「……末永くお幸せに」

春、ドアを開け出て行く。

## ○教会

祭壇の前にタキシード姿の圭人が立っている。

参列者席には春の姿。

圭人、チラッと春を見る。

目を合わせない春。

パイプオルガンの音楽が鳴る。

入り口の扉が開く。

【  
続  
く  
】

○マンション・部屋（夜）

宮本朱莉（26）・田口佳奈（26）、入ってくる。

朱莉「あー！ 楽しかった！」

佳奈「ねー。久しぶりにあんな騒いだかも」

朱莉、ソファに寝っ転がる。

佳奈「はいはい、そのまま寝ないよ」

朱莉「分かってるー。ちよっと休憩」

佳奈「明日は特別な日なんだから」

朱莉「だって眠いんだもーん」

佳奈「新婦が肌荒らしてたらどうすんの」

朱莉「だってえ」

朱莉、ソファに顔を埋める。

肩が震えている。

佳奈、気づいて、

佳奈「朱莉？ どうした具合悪い？」

朱莉、顔を上げる。

朱莉「あはは！ 楽しかった！」

佳奈、ため息をつく。

佳奈「よかったね」

朱莉「結婚したら思いっきり外で飲むなんて  
できないもん」

佳奈「まあ、そうだね」

朱莉「あーあ、これまでみたいにあのメンバ  
ーと会えなくなるのかあ」

佳奈「うん」

朱莉「あ、寂しい？」

佳奈「何だ嫌味かー？」

佳奈、朱莉の頬をつねる。

朱莉「痛い痛い」

佳奈「ごめんごめん」

佳奈、朱莉の頬を撫でる。

朱莉「もー、明日晴れ舞台」

佳奈「はいはい」

朱莉、ネックレスを外しテーブルの上  
に置こうとする。

微妙に手が届かない。

佳奈、朱莉の手からネックレスを受け  
取りテーブルの上に置く。

朱莉「佳奈、先にお風呂入っちゃっていいよ」

佳奈「うん、ありがとう」

朱莉「化粧落としとか、洗面所にあるの適当に使って」

佳奈「うん」

朱莉、ソファから立ち上がりタンスに向かう。

朱莉「えっとタオルとー」

朱莉、タンスからタオルとパジャマを取り出す。

朱莉「はい、どーぞ」

朱莉、タオルとパジャマを佳奈に渡す。

佳奈「ありがとう」

朱莉「いーえ」

佳奈「ごめんね、前日なのに泊めてもらっちゃって」

朱莉「いいの、いいの。どうせ明日同じ場所に行くんだし」

佳奈「そりゃそうだけど」

朱莉「一緒にいてくれて嬉しい」

佳奈「え？」

朱莉「一人だと緊張して眠れなさそうだし」

佳奈「……あー、私も緊張する」

佳奈、タオルに顔を埋める。

朱莉「えー？　なんでよー」

佳奈「友人代表のスピーチとか、荷が重すぎるよー！」

朱莉「ああ、それかあ」

佳奈「あー、胃痛くなってきた」

朱莉「とびっきり感動するやつ、お願いしますよー？」

佳奈「もお」

朱莉「どんなこと言うの？」

佳奈「え、それは当日のお楽しみでしょ」

朱莉「いーじゃん。ね、触りだけ」

佳奈「教えません。んじゃ、お風呂先にいた  
だくね」

朱莉「ん、いってらー」

× × ×

佳奈、入ってくる。

佳奈「お先ー」

ソファに座りスマホをいじっている朱莉。

朱莉「はいよー」

朱莉、スマホをテーブルの上に置く。

朱莉「お姉ちゃんと話してた」

佳奈「お姉さんと？」

朱莉「緊張するからさ、話聞いてもらおうと思っただのにさー」

佳奈「へえ……」

朱莉「(ムスツとして)お姉ちゃんにバカって言われたんだけど」

佳奈「ええ？」

朱莉「こんな時間まで飲んでたのかって」

佳奈「そりゃそうでしょ。ほら、早くお風呂入ってきな。早く寝よ」

朱莉「へいへい」

朱莉、ダンスからパジャマやタオルを取る。

朱莉「入ってくるねー」

佳奈「はーい」

朱莉、左手薬指の指輪を外し、棚の上のリングスタンドに置く。

朱莉、出て行く。

佳奈、棚の上のリングスタンドに近づく。

指輪をじっと見つめる。

指先でそっと触れる。

朱莉、ドアを開け顔を覗かせる。

朱莉「そーだ、佳奈！」

ビクツとする佳奈。

佳奈「なっ、何？」

朱莉「冷蔵庫に水とかあるから。適当に飲ん

でいーよ」

佳奈「あ、うん。ありがと」

朱莉「お酒飲んでもいーよー」

佳奈「もう飲まないよ」

朱莉「うふふ」

朱莉、ドアを閉める。

佳奈、ため息をつく。

台所に向かう。

冷蔵庫を開ける。  
ペットボトルが数本、ゼリー数個が入っているだけ。  
静かに閉め、リビングに戻る。  
床に座りカバンをまさぐる。  
ピンクの封筒を取り出す。  
封筒の中から便箋を取り出しぼんやりと読む。

ふとカバンをまさぐる。  
白い封筒を取り出す。  
ぼーっと見つめる。

佳奈「……」

白い封筒から便箋を取り出す。

× × ×

朱莉「出たよー」

朱莉、入ってくる。

佳奈、慌てて封筒をカバンにしまう。

朱莉「お？ 何隠したんですか」

佳奈「別に」

朱莉「なんだ、なんだ」

佳奈「明日の原稿」

朱莉「おっ！」

朱莉、佳奈のカバンに手を伸ばす。

佳奈「こら」

佳奈、朱莉の手を軽く叩く。

朱莉「ごめんなさい」

佳奈「明日のお楽しみだって」

朱莉「そうだね。うん。楽しみにしてる」

朱莉、ニヤニヤと佳奈を見つめる。

朱莉「泣いちゃうかもなー」

佳奈「ハードル上げないでよ」

朱莉「うふふ」

朱莉、台所に向かう。

冷蔵庫を開ける。

朱莉「なんか飲んだ？」

佳奈「いや」

朱莉「勝手に飲んでてよかったのに」

朱莉、水のペットボトルを二本持って

戻ってくる。

一本を佳奈に渡す。

佳奈「冷蔵庫、ほぼ空だね」

朱莉「引っ越しも近いからね。あんまもの買わないようにしてんの」

佳奈「そっか」

ダンボールがいくつか部屋に置いてある。

朱莉「結婚式終わったらちゃんと準備進めなきゃ」

佳奈「全然進んでないじゃん」

朱莉「ほんとにね」

朱莉、水を飲む。

佳奈「ね、なんであたしなの？」

朱莉「ん？」

佳奈「朱莉、友達多いんだし、スピーチ引き受けてくれる人もっといたでしょ」

朱莉「佳奈が適役だったの」

佳奈「あたしがこういうの得意じゃないってよく知ってるでしょ」

朱莉「えー、だって佳奈が一番の友達だから」

佳奈「……そう」

朱莉 「あ、照れた？」

佳奈 「照れてない」

朱莉 「もう、素直じゃないな」

佳奈 「うるさい」

朱莉 「だってさー、なんだかんだ言って佳奈  
が一番付き合い長いじゃん？それに」

佳奈 「それに？」

朱莉 「佳奈に一番祝ってほしいからさ」

朱莉、微笑む。

佳奈 「……」

佳奈、朱莉の頬をつまむ。

朱莉 「いた」

佳奈 「独身への当てつけかー？」

佳奈、朱莉の頬をつまんで伸ばす。

朱莉 「ひたいひたい」

佳奈 「あはは」

佳奈、朱莉の頬から手を放す。

朱莉 「佳奈は誰かい人いないの？」

佳奈 「いないねー。まあ出会いがないしね」

朱莉 「そんなこと言って、もうずっと彼氏い

ないじゃん」

佳奈「そうだねー」

朱莉「明日出会いあるかもよ？」

佳奈「ええ？」

朱莉「二次会は、席自由にしようと思って」

佳奈「そう」

朱莉「あ、それにブーケトス！ 佳奈の方に

投げるね」

佳奈「いやいいよ」

朱莉「遠慮すんなってー」

佳奈「ほらほら、もうこんな時間」

朱莉「うー、眠れるかなあ」

佳奈「寝れる寝れる。もう目閉じかけてるも

ん」

朱莉「寝るまで話しててね」

佳奈「あたしも眠いよ。ほら電気消して」

朱莉「はい」

朱莉、部屋の電気を消す。

佳奈「あたし下で寝るね」

朱莉、ベッドに入る。

朱莉 「えー、いいよ一緒に」

朱莉 、布団をめくる。

佳奈 「でも」

朱莉 「寝てる時に蹴ったりしないから」

佳奈 「本当かなあ」

朱莉 「そんなに寝相悪くないもん」

佳奈 、ベッドに入る。

朱莉 、佳奈に布団をかける。

朱莉 「なんか修学旅行の時みたい」

佳奈 「だね」

朱莉 「社会人になってから泊まりで旅行行こ

うって言ったのに結局行けなかったね」

佳奈 「仕事忙しかったから」

朱莉 「もう、行けないよ？」

佳奈 「そうだね」

朱莉 「もうちょっと残念がってよー」

佳奈 「残念だなー」

朱莉 「棒読み」

佳奈 「あはは」

朱莉 「佳奈って淡泊なところあるよね」

佳奈「そ？」

朱莉「うん。でもそういうところ好き」

佳奈「はいはい」

佳奈、朱莉に布団をかけ直す。

佳奈「そろそろほんとに寝なよ」

朱莉「なんかドキドキして寝れない」

佳奈「もうまぶた重そうじゃん」

朱莉「でも寝るのもつたいない感じがする」

佳奈「何だそれ」

朱莉「今日ほんとに楽しかった」

佳奈「よかったよかった」

朱莉「特別な日だね」

佳奈「特別な日は明日でしょ」

朱莉、目を閉じる。

佳奈「おやすみ」

朱莉「おやすみー」

× × ×

暗く、しんと静まった部屋。

佳奈、ゆっくりと起き上がる。

朱莉、寝返りを打つ。

佳奈「朱莉？」

佳奈、朱莉の顔を見る。

気持ちよさそうに眠っている朱莉。

じっと朱莉の顔を見つめる佳奈。

ベッドから手を伸ばしカバンを引き寄

せ、中から白い封筒を取り出す。

便箋を取りぼーっと見る。

すっと息を吸い、

佳奈「：：朱莉へ」

佳奈、朱莉の顔をチラッと見る。

眠っている朱莉。

佳奈、便箋を読んで、

佳奈「朱莉とは、中学校の時出会って、かれこれ十年以上の付き合いになります。明るくて、天然で、一緒にいると楽しい気持ちにしてくれる。そんな朱莉が結婚すると聞いて、幸せそうな顔を見て、本当に嬉しかったです。朱莉の幸せを誰よりも願ったのはあたしだから。：：あたしは、朱莉を幸せにできないから」

佳奈、朱莉の顔を見る。

佳奈「あたしが幸せになるってことは、朱莉を、朱莉の周りの誰かを不幸にするってことだから。だから、朱莉には幸せになってもらいたい。あたし以外の人と。それがあたしの一番の幸せだから」

佳奈、朱莉の頬を撫でる。

佳奈「この先、たぶんあたしは、あなた以上に誰かを愛することなんて無いんだと思う」

佳奈、手紙をくしゃくしゃに折る。

カバンに突っ込む。

朱莉に背を向け横になる。

声押し殺して涙を流している朱莉。

朱莉「（か細い声で）ごめん……」

## ○ 結婚式場

パイプオルガンの音楽が鳴る。

入り口の扉が開く。

父親（53）にエスコートされ入っていく

るウエディング姿の朱莉。  
参列者席でじっと朱莉を見つめる佳奈。  
まっすぐ祭壇の前に進む朱莉。

【続く】

○ホテル・部屋（夜）

淡路拓真（29）、宮本麻由（29）をベッドに押し倒す。

見つめ合う二人。

拓真「……」

麻由「……ふっ」

吹き出す拓真と麻由。

拓真「あはははは！」

麻由「あはははは！」

拓真、麻由の横に倒れこむ。

麻由「（笑いながら）顔っ！ 顔！」

拓真「そっちこそ！」

麻由「あー、おかしい」

麻由、目尻を拭う。

麻由「あーあ、結婚式前夜に何やってんだか」

拓真「……ほんとにな」

麻由「ちょ、水だけ飲みたい」

拓真「コンビニで買ってくる？」

麻由「いや、その冷蔵庫に入ってるやつ」

拓真「一本五百円のやつ？」

麻由「うん」

拓真「えー、コスパ悪」

麻由「だってわざわざ買いに行くのめんどいんだもん」

拓真「俺買ってきてやるって」

麻由「いーいー。普通に金あるし」

拓真「（笑って）普通に金あるし」

拓真、備え付けの冷蔵庫からペットボトルの水を取り出す。

麻由、受け取る。

麻由「ありがと」

麻由、起き上がり水を飲む。

麻由「あんた大学ん時からそうだよね」

拓真「そうって？」

麻由「ケチくさいというか、生活力があるというか」

拓真「いい旦那になるな」

麻由「いやまずその前にモテないでしょ」

拓真「いやいや、結局最後は人間力だから」

麻由「言うほど人間力ないくせに」

拓真「めっちゃくちや言うな」

拓真、仰向けに寝る。

麻由「現にこうして独身じゃん」

拓真「それは言わない約束だろ」

麻由、拓真の腕を伸ばす。

その上に頭を乗せ寝転がる。

麻由「まあいつか拓真にもいい人が見つかるよ」

拓真「はいはい」

麻由「あ、いい人っていうのは運命の人とかっていう意味じゃないからね？」

拓真「…何？」

麻由「もはやそんなんで結婚相手見つける歳じゃないですからね」

拓真「まだまだ若いと思っただけだな」

麻由「もうすぐ三十代ですから」

拓真「三十代近づくとも結婚相手に何を求めるんですか」

麻由「何も求めない。妥協よ、妥協」

拓真「夢も希望もねえな」

麻由「譲れない条件を妥協できる人と結婚するのよ」

拓真「なるほど」

麻由「やっぱ人間力なのかなー」

拓真「なんだか随分リアリストになったね」

麻由「ん？」

拓真「大学の頃は夢見る夢子ちゃんだったよな」

麻由「あー、黒歴史ね」

拓真「黒歴史」

麻由「大学は黒歴史ばっかだわ」

拓真「俺と付き合ってたことも？」

麻由、拓真の顔を見る。

拓真「今のは忘れて」

拓真、手で顔を覆う。

麻由「いやいやいや」

麻由、拓真の手を顔から放す。

拓真「なんか女々しかったな」

麻由「ちよっとびっくりしたんだけど。え、何？」

拓真「いや違う、口が滑った」

麻由「口が滑った？」

拓真「違うな、思ってもないことを口にしてしまった」

麻由「思ってもないんかい」

拓真「ほんとほんと」

麻由「とか言いつつも？」

拓真「いやまじでないから」

麻由「ほうほう」

拓真「まじで」

麻由「ふーん」

拓真「正直未練があったら会ったりしてないから」

麻由「え、逆に？」

拓真「逆に」

麻由「へえ」

拓真「そういうタイプだから」

麻由「そういうタイプかー」

拓真「うん」

麻由「……もうこうしてさ、ホテルで二人き

りで会うこと無くなるのかな」

拓真「無くなるでしょうね」

麻由「無くす？」

拓真「ていうかさそっちが気にするタイプでしょ。  
よ。気持ち悪いと思うでしょ？」

麻由「うん、まあ」

拓真「じゃあ無くすというか自然にこういう  
機会も無くなるでしょう」

麻由「そっかー」

拓真「まあ、俺ら相性は良かったよな」

麻由「急激な下ネタ」

拓真「こんなの下ネタに入らないよ」

麻由「あー、ウケる」

拓真「ウケましたか」

麻由、目尻を拭う。

麻由「あー、今何時？」

麻由、ポケットからスマホを取り出し

画面を見る。

麻由「思ったより遅くなかった」

麻由、スマホをベッド脇のテーブルに

置く。

麻由「どうする、これから」

拓真「どうするって？」

麻由「……する？」

拓真「しない」

麻由「しないんだ」

拓真「これが最後だって思ってたのは趣味じゃない」

麻由「んー、まあそうか」

麻由、伸びをする。

麻由「なんか切なくて萎えるしね」

拓真「だろ？ あれが最後だったんだなあっ

てふと思ひ出すのが一番いい」

麻由「最後……：どんなだったっけな」

拓真「さあ？」

麻由「覚えてないんかい」

拓真、あくびをする。

麻由「眠いの？」

拓真「あー、もう眠いわ」

麻由「このまま寝る？」

拓真「うん」

麻由「あたしはシャワー浴びて寝るわ」

拓真「明日でよくね？」

麻由「化粧も落とさないといけないし。明日

朝忙しいし」

拓真「そっか」

麻由「先寝ててよ」

拓真「分かった」

麻由、ベッドから起き上がる。

拓真「おやすみ」

麻由「おやすみ」

麻由、拓真に布団をかける。

麻由「おし」

麻由、布団の上から拓真を叩く。

拓真「暴力的すぎる」

麻由「あはは」

× × ×

テーブルの上のスマホが鳴る。

麻由、シャワーから出て慌てて電話を

取る。

麻由「もしもし？」

麻由、チラッと拓真を見る。

寝返りを打つ拓真。

起きる様子はない。

麻由「あ、うん大丈夫だけど。うん。まだ起

きてたの？ あんた明日結婚式でしょ。

え？ 飲んできたの？ もう、バカ」

麻由、ペットボトルの水を飲む。

麻由「緊張する？ まあそうでしょうね。で

も楽しみなよ。一生で一度の日なんだから」

麻由、寝ている拓真をじっと見つめる。

麻由「幸せになんなよ、あんたは」

### ○結婚式場

参列者席に座っている麻由。

隣に座っている母親（52）、麻由に耳打

ちする。

母親「お父さん、朝から緊張しちゃって」

麻由「そりゃバージンロードなんて初めてだ

からね」

母親「あんたで練習してればよかったのにね」

麻由「今その話は」

母親「向こうのお兄さんも、独身なんだって  
ね」

麻由「そーですね」

母親「同じ大学だったんでしょ？ 顔合わせ  
の時びっくりしたわあ」

麻由「だね」

母親「どうなの？ いい感じの人じゃない」

麻由「はあ？ ないない」

母親「ええ？」

麻由「気持ち悪いでしょ、兄弟そろって家族  
なんて」

母親「そお？」

向こう側の参列者席に座っている拓真。

ぼーっと拓真を見つめる麻由。

祭壇の前で緊張気味で立っている圭人。

パイプオルガンの音楽が鳴る。

入り口の扉が開く。

振り返る人々。

父親にエスコートされて入ってくるウエディングドレス姿の朱莉。

歩いている朱莉を拍手しながら見つめる麻由。

その視線の先に拓真が見える。

麻由「(ぼそっと)つまんない意地張っちゃつたなー……」

参列者席で拍手している春。

朱莉を見つめる佳奈。

祭壇の前で向かい合う圭人と朱莉。

【終】